

NEWS LETTER

2025/02

vol.36



CONTENTS

- ・ダイバーシティ推進担当 菊池理事が行く！
教育学野長 勝二博亮 先生編

茨城大学ダイバーシティ推進室

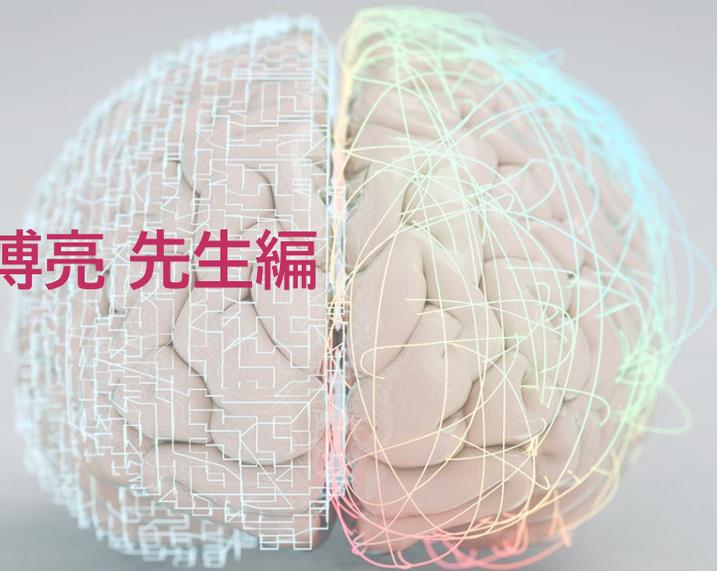
ダイバーシティ推進室は、平成28年4月に男女共同参画推進室を改称して開設されました。

学内外の意識啓発、ワーク・ライフ・バランス環境整備、研究力向上と女性リーダー育成、次世代育成の活動を軸に、お互いの個性が尊重されて、学生・教職員それぞれの能力が十分に活かされる、ダイバーシティ環境が整っている大学づくりを進めています。

ダイバーシティ推進担当

菊池理事が行く！

教育学野長 勝二博亮 先生編



学野長や機構長のもとを訪ね、普段知ることのできない教職員の魅力をお届けしている菊池理事が行く！シリーズ。今回は、教育学野の勝二博亮学野長にお話を伺ってきました。勝二学野長の研究を通じて感じたダイバーシティや若手時代にドイツで在外研究されていた時の話に注目です！

改めて先生のご専門を教えてください

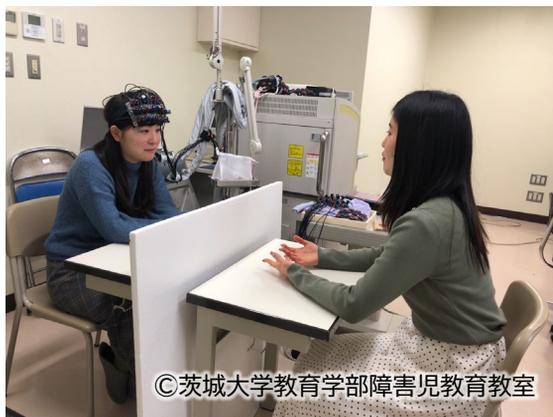
ーダイバーシティ推進室では大学にいらっしゃる様々な方々の魅力を発信しています。勝二先生とは出張で台湾にも一緒に行ったことがあり、色々とお話させていただいた間柄でもあります。幅広い研究を行っていることは既に存じ上げているのですが、改めてどのような研究をしているのか教えていただけますでしょうか。

障がい児を対象にした研究を行っています。博士論文では知的障がい児は健常児と比べて有効に使える視野が狭いため作業効率が悪くなるという仮説を立て、周辺視での識別状況を計測し、その時の脳活動を見るという実験研究を行っていました。



勝二博亮 学野長

菊池あしな 理事



©茨城大学教育学部障害児教育教室



©茨城大学教育学部障害児教育教室

先生が研究を通じて感じたダイバーシティについて教えてください

一勝二先生は今までの研究からたくさんのご経験をされてきたと思いますが、今までの経験を通して多様性の大切さや、ダイバーシティについて感じられたり考えられたことがあれば教えてください

実験研究をする時に、健常は健常の、知的障がいはいは知的障がいという群を作って比べるのですが、「知的障がい」を”群”と一纏めにして良いのか？」と前々から疑問があって…。理由は、群にしたとしても個人差が大きすぎるからです。知的障がいの原因をみても染色体異常や遺伝子異常とはっきり分かっている人がいる一方、原因はよく分からないけど知能検査をしたらある一定の水準以下で、社会に適応する力も弱いので知的障がいと診断される人もいます。知的障がいの定義はありますが、定義があったとしても、その原因まで考えただけでも多様性があるんです。



「知的障がいを群にして良いのか？」という問題が解決されたわけではないですが、私自身はここ10～15年くらいの研究を通して、研究で知的障がいという群を無理に作らずひとつひとつケースで見えていく方が良いと考えています。ただ、個人ごとに見ていくと健常にも個人差があるので、「健常だって本当に群にして良いのか？」という問題が生まれてきます。

研究をしていると、健常のなかにも当然ダイバーシティ(多様性)はあるし、障がいになってくるとさらにダイバーシティがあると感じます。健常も障がいもまとめて集団とするよりは、ひとりひとりのストーリーを追って行った方がいいのかなというところで研究とダイバーシティは関わっていると思いました。



一先生のお話を聞いていて、昔インドに行った時のことをふと思い出しました。インドのレストランで食事をしていたときに、後ろの方から日本人の話し声が聞こえてきました。どうやら子育て中のお母さんたちが子供の話をしていたようで、「うちの子どもはインドで日々伸び伸び生きているけれど、もし日本にいたら、この子たちの性格や行動は、きっと何か病名を付けられてしまうかもしれない。でもインドでは、ちょっと風変わりな行動や性格があっても、健常か、健常ではないか、カテゴライズされにくいよね。」というような話でした。医学や研究が進んで、私たち人間が「障がい」というカテゴリーに入ることは以前より増えてきている現代なのだと、この話を聞いた時に色々と考えられました。

障がいの概念自体は「個人特性のみではなく、個人特性と環境との間で決まる」という考え方があります。例えば、注意障がいがあった場合、日本という環境だと「教室の中にいられない」ということが問題視されれば障がいになる可能性がある。しかし、**そもそも教室がない世界だったら、どこを立ち歩こうが社会の中で障壁になることがないので、同じ個人特性があっても障がいにはなりません。**国や文化によって障がいになること、ならないこと、はあるんじゃないかと思います。日本のように周囲に気を配ることが日常的に習慣としてある世界だと、言葉の背景を理解することや、集団の中の振る舞いに気をかけることがより多くなります。**生きづらさの種類は国や文化、社会によって違うのかもしれない。**



先生は以前、ドイツで研究をされていた時期があったと伺いました

—海外に出るとダイバーシティについて感じることはより増えると思っています。勝二先生はドイツで在外研究を行っていた時期があると伺いました。ドイツでの生活はいかがでしたか？

約1年、正確には11カ月ですね。ドイツのギーゼンという街に滞在して、在外研究を行っていました。ドイツでの生活は正直孤独でした…。妻が4月に出産したんですけど、その前の2月に単身でドイツに行きました。出産に立ち会うこともできなかったです。うちは近くに親戚がいなかったので、妻は出産するとき自分でタクシーを手配するなどしなければならず、大変だったと思います。不安も大きかったと思いますが、冷静に対応していましたね。在外研究の制度上、何かあった時に飛行機の行き帰りを含めて1週間だけ帰国できるのですが、近くに頼れる人がいないということで帰国が認められて、お宮参りの時にあわせて一時帰国し、日本に4～5日滞在しました。結局、生まれてから10カ月くらいの間、子どもの成長過程を見ることはできなかったです。実は家族もドイツに来るという話があったんですけど、様々な準備のことを考えると、無理してでも来て欲しいと妻には言えませんでした。そのため、家族用の大きな部屋で1年間1人で過ごしました。



孤独という寂しさの中でも粛々と研究を進めていました。ドイツに行ったからにはきちんと論文にして帰ってくるのが目的の一つでもありました。ただ、その目的が達成できるかどうかはプレッシャーではありました。

—11カ月で論文を書き上げたのですか？

そうですね。ドイツで受け入れ先の先生から「この状態だったらあとはメールのやり取りで何とかなる」というところまで論文を書いて帰国しました。帰国してから数カ月後にすぐに投稿できました。

ードイツにいる間にも、被験者を対象とした実験を行っていたのですか？

していました。実験の説明の初めの部分だけドイツ語で用意して、あとは英語で説明していました。被験者を集める際には、自分自身で色々な場所に連絡先を書いたポスターを掲示し、一般の人やゲストハウスに住んでいる友人を集めて行っていました。ドイツは英語がほしい通じたというのがありますが、連絡先を見て電話してきた方に「英語を話せますか？」と英語で聞いて、話せない場合は無言で電話を切られることもありました。

ー知らない国に行って、被験者を集めるというのは大変ですね。

論文の被験者と言ったら誰もがOKと返事してくれるわけでもないでしょうし…。

何名くらい集めたのですか？

今は結構集めないといけないのですが、当時は約20名程度集めれば研究としては何とかだったので、最終的には16名くらいのデータで論文を書いたと思います。



ードイツと日本におけるダイバーシティ的な違いを感じたことはありましたか？

現地で一緒に働いていたドイツ人は17:00になったら帰っていましたし、クリスマスの日は店が閉まっていて町に人がいなかったですね。また、**休暇は休暇という考えがしっかりしている**と感じました。例えば、9月末で退職の場合「1ヶ月分の有休をまだ使っていないから」と言って、9月いっぱい是有休で8月が最終出勤という人がいました。それでも論文はしっかり書き上げていたので、**生産性が高い**と思いました。

🌱 ダイバーシティ推進室や社会に求めることはありますか

ーダイバーシティ推進室は教職員の仕事・研究と家庭生活の両立を応援しています。先生はダイバーシティ推進室に求めるものはありますか？

難しいですね…。これはダイバーシティ推進室に求めることではないかもしれませんが、様々なことを実施していくためには余裕があるといいなと感じています。例えば、人的な余裕があると長期間出張に行くことや休暇取得もしやすくなる。人的な余裕を生み出すためには、お金も必要になるので財政的な余裕も必須です。ただ、この余裕は大学レベルで解決するのは難しいので、社会レベルで何とかしなくてはいけないことではないかと思っています。

🌸 ホツとする瞬間

ー勝二先生のホツとする瞬間はどのような時ですか？

ホツとする瞬間ではないかもしれませんが、水戸で毎年開催されるマラソン大会で6時間くらい走ったり歩いたりしている瞬間は仕事のことを考えている暇がないので、ある意味ホツとします。また、普段見ず知らずの人から応援されることはなかなかないので、走っている時の沿道の声援は新鮮に感じますね。走ることは特別好きではなく、年に1回の苦行だと思っていますが、この苦行に耐えられたならどのようなことにも耐えられるとも思っています。走っている時以外だと、寝ている時が一番ホツとしますかね。幸いなことにたっぷり寝ることができるタイプです。

ー勝二先生ありがとうございました！

